

ウィリアム・モリス研究者 としての大槻憲二

——モリス誕生百年祭を中心に——

川 端 康 雄

I はじめに

1934（昭和9）年はウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）の生誕百年にあたる年だった。生国のイギリスで、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館での記念展覧会のほか、いくつか行事が催されたのは当然のことであるが、日本でもかなり盛大な記念展が開かれたことは、在日の英米人にとってはちょっとした驚きの種だったようである。東京の英字新聞『ジャパン・アドバタイザー』の1934年4月24日付の紙面に“Morris and Japan”の見出しで掲載された記事は、そうした驚きを伝えている。「日本に居住するアングロ・サクソン人は、この地で彼をもてなしてくれる人々〔日本人〕が、彼自身の歴史上の著名人を高く評価するのを知って、驚くことがしばしばある」とその記事は語る。英米人にはいささか卑俗と思われる人物が日本人に受けているのを目にしたり、逆に、前者が高く評価する人物を日本人が一顧だにしないというケースも見られる。しかし、シェイクスピアの場合のように、どうやら「偉大な芸術家に関しては二つの民族は常に共通の立場に立っている」ようだ——

そのことをさらに証明する機会が、本日より丸善書店にて開かれる興味深い展覧会である。これはイギリスの詩人、美術家、工芸家、政治活動家であるウィリアム・モリスの生誕百年を記念するものだ。本展覧会の

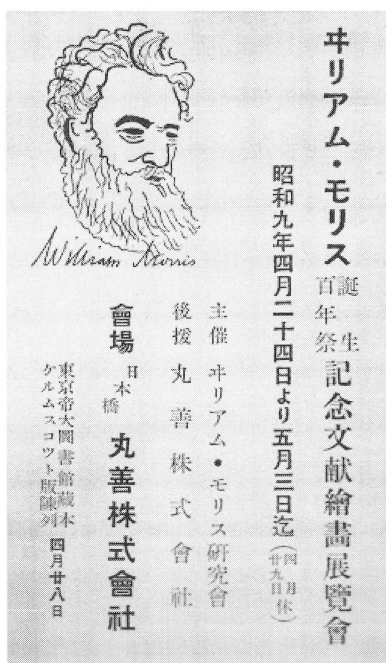


図1 モリス誕生百年祭記念文献絵画
展覧会案内

後援者は、有名な著述家・英文学者である Mr. K. Otsuki と、19 世紀のイギリスの著述家たちの研究に専心してきた Mr. R. Mikimoto である。後者は、ラスキンの著作についての研究書を多く出し、日本ラスキン協会の創立者である⁽¹⁾。

ここで紹介された展覧会の正式名は「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧會」といい、東京日本橋・丸善書店階上で、1934 年 4 月 24 日から 5 月 3 日まで、10 日間にわたって開催された。東京帝国大学図書館が所蔵するケルムスコット・プレス版『チャーサー作品集』が一日限りで展示されたほか、ケルムスコット・プレスの出版書のみで 23 点、その他モリスの邦文献、欧文献、絵画、肖像など、あわせて 280 点に達する、当時としては極めて

充実した展覧会であった。同年 3 月に出された同展の「趣意書」によれば、主催者は「キリアム・モリス研究會。東京ラスキン協會。丸善株式會社」の 3 団体（ただし、展覧会案内のカード〔図 1〕の記載では「キリアム・モリス研究會」のみとなっている）。賛助者は（いろは順で）「岩倉具榮、長谷川誠也、本間久雄、大槻憲二、齋藤勇、御木本隆三、日高只一」の七名。展覧会事務所は「東京市本郷区駒込動坂町三二七 大槻方」⁽²⁾。この展覧会の目録として『モリス書誌』が編まれて、会期中に販売された。その奥付を見ると、「昭和九年四月廿四日発行 定価四十銭 編輯及び発行者……東京キリアム・モリス研究會」とあり、またその「代表」として「大槻憲二」の名が記されている⁽³⁾。

この展覧会の中心人物はこの大槻憲二（1891-1977）その人にほかならな

い。主催者名に「モリス研究会」の名があるが、筆者の知り得たかぎりでは、この展覧会与『モリス書誌』のなかで出てくる以外では（また両者に言及した記事の他には）、この研究会の名は公的な場には見えない⁽⁴⁾。そして、残された史料を見ると、事実上大槻がこの一大イベントの雑務をほとんど一手に引き受けて展覧会を組織したのではないと思われる。

「後援者」として名前が挙げられているもう一名、御木本隆三（1893-1971）については、そのラスキン資料のコレクションを基礎にした財団法人ラスキン文庫が1984年に設立され、これが日本におけるラスキン研究の拠点になっていることもあり、その業績は現在ではかなりよく知られている⁽⁵⁾。それに対して、大槻憲二の方はどうかといえ、ほとんど忘れ去られているといっていよい。大槻を知る少数の人でも、主として東京精神分析学研究所を主宰した在野の精神分析学者として、またフロイトの初期の紹介者・翻訳者として記憶しているのであろう。たしかに、それは彼のライフワークであった。しかし、大正後期から昭和初期にかけて、大槻は、本間久雄（1886-1981）らと協働して、モリス研究の一翼を担い、非常に質の高い仕事をしたのであった。本稿は、丸善書店でのモリス誕生百年祭記念展覧会の中身を中心にしつつ、大槻のモリス研究に新たな光を当てることを目的とする。

II 大槻憲二のモリス研究

まず大槻憲二の略歴を記す。大槻は1891（明治24）年8月2日に兵庫県淡路島に生まれた。神戸で成長し、第一神戸中学校（現神戸高等学校）卒業後、東京美術学校（現在の東京芸大）西洋画科に入学。絵画の道に進んだが、進路変更して同学校を中退し早稲田大学文学部に入学。1918（大正7）年、同英文学科を卒業。同年、鉄道省運輸局旅客課、東亜案内に就職し、旅行案内書の執筆・編集に携わる。その間ドイツ語の研究に励む。1924（大正13）年に結婚を機に官吏の職を辞し、文筆業に入る。『早稲田文学』を中心に評論家として活躍。1927（昭和2）年頃から精神分析学の研究とフロイトの翻訳に着手。1929（昭和4）年頃、自宅（阿佐ヶ谷、翌1930年に駒込動坂町に転居）を本部として東京精神分析学研究所を設立。同研究所に出版部を設け、『フロイド精神分析学全集』（全10巻、1929-33）ほかの精神分析および

文学関連の書籍を刊行。さらに同出版部より雑誌『精神分析』を1933（昭和8）年5月に創刊。戦争末期の1945（昭和20）年に栃木県西那須野に疎開。『精神分析』は1931（昭和16）年まで9年間続いたが、戦争による紙類の統制により廃刊。戦後1952（昭和27）年に再刊。同誌を主要な発言の場とし、定例研究会を継続。1977年2月23日没。著作は心理学・精神分析学関係のものを中心として単行本だけでも50冊以上ある⁽⁶⁾。

大槻憲二がモリス研究を発表したのは、1921（大正10）年から1935（昭和10）年までの15年間、30歳から44歳までの期間だった。単行本としては、研究社英米文学評伝叢書の『モリス』（1935年）のみであるが、『早稲田文学』を中心として、雑誌にモリス論を多数寄稿しているに加えて、扱う観点も、社会思想的な側面にとどまらず、美術、建築、デザイン、そして文学と、モリスの多面体に本格的に取り組んでいたといえる。加えて、モリスの代表的な講演集『芸術への希望と不安』（*Hopes and Fears for Art*, 1882）の全訳を『芸術の恐怖』というタイトルで1923（大正12）年に出していることは特筆に値する⁽⁷⁾。以下に、モリスを扱った大槻の主要な論文のリストを示す。便宜上、「社会思想」、「建築・美術・デザイン」、「文学」、1934年のモリス展覧会関連のエッセイと大別する。

社会思想関連

「モリスの社会主義に就いて」『高原』1921年

「キリアム・モリス芸術的社会主義体系」『早稲田文学』1924年10月

「モリス思想の現代的意義」『信濃毎日新聞』1926年1月21-23日

「キリアム・モリスとギルド社会主義」『早稲田文学』1927年8月

建築・美術・デザイン関連

「キリアム・モリスの図案論」『中央美術』1924年3月

「キリアム・モリスの『赤い家』」『住宅』1924年4月

「キリアム・モリス 図案彩色論」『アトリエ』1925年2月

「キリアム・モリスの刺繍観」『工芸時代』1927年1月

「美術家としてのロゼッティ：キリアム・モリスとの対比」『パンテオン（ロゼッティ記念号）』1928年8月

「モリスの美書趣味——ケルムスコット・プレスの設立まで」『遊牧記』

1929年8月

「ケルムスコット創立の趣旨」『遊牧記』1929年9月

「キリアム・モリスの図案彩色論」『工芸美術を語る』（単行本に分担執筆）アトリエ社、1930年7月

「ケルムスコット刊行本に就いて」『書物』1934年8月

文学関連

「労働詩人としてのモリス」『早稲田文学』1926年6月、7月

「詩人としてのキリアム・モリス」『詩神』1929年7月

「北欧神話とモリス」『英語と英文学』1930年1月

「キリアム・モリスの詩劇『恋だにあらば』の研究」『早稲田文学』1930年7月

「キリアム・モリス」『世界文学講座4 英吉利文学篇』下（単行本に分担執筆）新潮社、1930年11月

「詩人モリスの精神分析」『英語研究』1930年12月

「キリアム・モリスの『夢』」『精神分析』1933年8月

「キリアム・モリス『地上楽園』の研究」『精神分析』1934年3-5月

「William Morrisの涅槃思想」『稲英』1934年3月

モリス展覧会関連

「誕生百年祭に際しモリスを憶ふ」『都新聞』1934年3月23-25日

「モリス文献展を催して」『東京堂月報』1934年5月

「キリアム・モリスと現代」『書物評論』1934年8月

「モリス展覧会後日談」『書物展望』1934年11月

「本年度の内外モリス新文献」『東京堂月報』1934年12月

タイトルに「モリス」の名が見える論考をざっとひろってみただけでもこれだけあるのだが（書評などは割愛した）、文中でモリスに言及した論考はこれだけではすまない。とりわけ、現代社会や政治経済の問題を扱った時事的な評論において、大槻は頻繁にモリスの思想の重要性を強調している。「文芸評論壇の最近傾向」（『早稲田文学』1924年7月号）などはその典型的な例である。そのなかで大槻は、「世界戦争〔第一次世界大戦〕」の終息を分岐点として、世界の思想が二大傾向、すなわち「世界人類を同胞として見る

平和主義、世界主義、社会主義、平等主義、民主主義」の傾向と、インドやアイルランドの独立運動のごとき、「更にもつと伝統的な、民族的、国民的、地方的の事業」という二つの顕著な傾向に進展しつつあると指摘し、「此等二者が或る意味に於いて融合し調和してゐる思想なり主張なりが存在してゐる事を忘れてはならない。それは……近来愈々熱度を高めて来るらしく思はれるキリアム・モリスの研究と祖述とであらう。……キリアム・モリスは無論世界戦争以前の人ではあるが、その卓見は或る意味に於いて現代二大傾向の綜合としての特質を具へてゐる。少くとも具へんとするものを教ふる何者かを持つてゐる」⁽⁸⁾と述べている。

大槻の没後にそのモリス研究に言及したものとしては、筆者は寡聞にして、小野二郎（1929-82）の短文しか知らない（大槻は1977年に85歳で没しているが、小野の文章はその翌年に発表されたもの）。小野の世代にとっては、大槻憲二という名は、「戦前のフロイト紹介者」として親しかった。「戦後間もなくでは、フロイトを勉強しようとしたら、この人の翻訳の『フロイド』以外にはなかった。伊藤整の批評を読むと、この大槻訳『フロイド』というのがよく顔を出していた。ところが、この大槻氏は、フロイトと同様、あるいはその前から、わがモリスの研究に入っていたのである。それもかなり総体的に」。そう小野は指摘し、1935年刊の研究社の「英米文学評伝叢書」の『モリス』は、「あまり迫力のあるものではなかった。しかし、これは時代のせいであろう」と辛口の評言を加えているが、それ以前の大槻の仕事については、以下のように評価している。

この〔大正時代の最後の〕五、六年の大槻のモリス研究は、過去のモリス研究のいかなるものよりも深く、芸術家モリスと、社会主義者モリスとを統一的に理解しようとしたものとして高く評価できる。大正四年の岩村透の『芸術と社会』以来、根絶えていたと思われるこのアプローチが、ここで一先ず花は開いたといえるだろう。大正デモクラシーの波に乗って、さまざまな社会主義思想が紹介され、運動も起ったわけだが、その一部として平板な解説をするだけの論が多かったこの時代、また民衆派詩人たちの熱気もごく一時期モリスの片身をとらえたようにも見えたが、これら一連の大槻の論考の焦点の深さには敬意を表さざるを得な

い。その解放思想の理解のしかたが、フロイトへ向わせる根本動因であったと思われる。同時にフロイト研究は、とりあえず「政治用語」を使わずにすむというところに、大正末期をピークとして、モリス研究が精気を失って行く理由もまたあるといわなければならない⁹⁾。

この評言はたしかに妥当であり、「近来愈々熱度を高めて来」た「モリスの研究と祖述」は、大正末期に多くのすぐれた成果をもたらした。単行本のみを列挙しても、加田哲二『ウキリアム・モリス——芸術的社会思想家としての生涯と思想』(岩波書店、1924)、北野大吉『芸術と社会』(厚生閣、1924年)、本間久雄『生活の芸術化』(東京堂、1925)、本間訳のモリス講演集『吾等如何に生くべきか』(東京堂、1925)、大槻訳のモリス講演集『芸術のための希望と不安』(聚芳閣、1925。1923年刊の小西書店版『芸術の恐怖』の改題・改訳版)。布施延雄によるモリス『ユートピアだより』の初の全訳(『無可有郷だより』至上社、1925)、矢口達による『地上樂園』の抄訳(国際文献刊行会、1926)と、大正13年から15年に集中している。本間久雄の名著の誉れ高い『生活の芸術化』は『早稲田文学』に発表した一連のモリス論を原型としているが、本間に劣らずに(そしておなじく『早稲田文学』を主たる場として)精力的にモリス論を発表していった大槻は、この白熱した時期の一連の論考を本間のようには単著にまとめなかった(大槻のモリス研究が省みられていない一因がここにあるのかもしれない)。しかし、1924年の「キリアム・モリス芸術的社会主義体系」をはじめとする一連の大槻の論考は、たしかに小野の言うように、「過去のモリス研究のいかなるものよりも深く、芸術家モリスと、社会主義者モリスとを統一的に理解しようとしたもの」として貴重である。

そして、大正末期をピークとして、「モリス研究が精気を失って行く」という小野の全般的な見取り図も妥当であろうが、しかし大槻自身は、昭和期に入ってから、精神分析学にシフトしつつも、『地上樂園』、『恋だにあらば』、『ヴォルスング族のシグルド』といったモリスの詩作品の読解を通して、モリス研究を持続していたのである。そしてフロイトと精神分析学の研究は、モリスの詩作品を読む際に大槻に新しい視点を与えたのであり、それは、「詩人モリスの精神分析」、「キリアム・モリスの『夢』」、「キリアム・モリス

『地上樂園』の研究」といった論考に明らかである（後者二点は彼が主催した東京精神分析学研究所の研究誌『精神分析』に掲載された）。この視点は1935年刊の研究社英米文学評伝叢書『モリス』にも持ち込まれている。例えばモリスの初期の散文ロマンス「會堂物語（The Story of the Unknown Church）」を扱った節で、大槻は、物語に出てくる二つの夢について、精神分析を試みる。「この夢の調子が如何にも淋しく悲しくて、死の国の話であると云ふ印象を少くとも受けられるであらう。精神分析学者に依ると、夢の中に於ける沈黙は死の象徴である事が、幾多分析実験の結果によつて明らかになつてゐる」⁽¹⁰⁾。そして大槻はこう指摘する。

一体、モリスは愛即死の詩人である。愛の極致は死である。死の恐怖は愛に依つて救はれると云ふ神秘的思想が彼の詩作の殆ど全部の根柢を流れてゐる。彼の生涯の代表作とされてゐる「地上樂園」に於て、この思想は最も華かな形をとつて評言せられてゐるとするならば、この「會堂物語」は「地上樂園」の先駆であつたと云ふべきである⁽¹¹⁾。

ここで展開されている「愛即死の詩人」モリスの分析は、20世紀後半にモリス再評価の動きに伴つて出てきた、モリス・ロマンスの読み直しを先取りする面がある⁽¹²⁾。『地上樂園』を大槻は「文字を用材として打建てた大伽藍」とみなし、こう続ける。「我々はこの中にさまようて到るところに美しい装飾や絵画を長め、それ等の絵画の表はす悲しく意味深い物語を思ふて、人生の悲喜を具に味ふのである。私にとつてはこの書は無限の魅惑である。いつかはその研究を完成したいと念じてゐる」⁽¹³⁾。

あいにく、大槻の『地上樂園』研究は未完に終わつたらしく、研究社版の『モリス』以後、モリスの詩を扱った論文がその後発表されることはなかった。しかし、文学テキストという一次資料の直接経験とその批判という作業を決しておろそかにせず、「芸術的社會主義者」モリスの本質に迫つた大槻の業績は、高く評価されるべきであらう⁽¹⁴⁾。

このように大正後期から昭和初期にかけて本格的にモリス研究に取り組んだ大槻憲二が、1934年のモリス生誕百年に際して、丸善での展覧会を組織したのだった。どのように準備を進めたか、次節でそれを見ておこう。

Ⅲ 展覧会の組織と出品者たち

丸善の展覧会の終了後、大槻はそれを総括する一文「モリス文献展を催して」を『東京堂月報』に寄せている。以下に、初めの二段落を引用する。

四月二十四日から五月三日まで十日間、私どもが主催となり、日本橋の丸善書店階上で、英国十九世紀の詩人、工藝美術家、社会運動家であつたキリアム・モリスの誕生百年祭記念のための文献絵画展覧會を催し、社會的反響を呼び、主催者の一人として甚だ面目を施した。こゝにまた本月報編輯者から、同展覧會についての感想を記してくれとの高嘱である。

モリスの誕生日は実は三月廿四日であるが、その時分は学生の春季休暇に相當するし、それに展覧會の準備や目録を製作のためにはなかなか時日を要するので、特に一ヶ月だけ延したわけである。この件で丸善の當事者と交渉を開始したのが、二月六日であつたが、「展覧會趣意書」兼出品勧誘状が出来たのは三月十二日であつた。各勧誘状には数枚のカードを添へ、それには、それぞれ番号、書名又は畫名、種別、著者名、發行所名、發行年月、版数、解説、出品者住所氏名などを書込んで返送して貰ひ、重複してゐるものは、お断りし、重複せぬものだけ出品を乞ふことにした⁽¹⁵⁾。

ここで言及されている「展覧會趣意書」も幸い現存する。同展覧會關係の他の資料と共に大槻はこれもファイル「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧會記録」に綴じているからである。趣意書の冒頭の挨拶文にこうある。

謹 啓

来る三月廿四日はキルヤム・モリス誕生百年祭記念日に相當いたしまずにつき、モリスに興味を有する人々相共同して、その内外文献、絵画、肖像の展覧會を催したく、仮に我等、僭越ながら率先して犬馬の野をと

る事になりましたに就き、幸に大方の御協力を得たく、切にも願ひ申し上げます。我等に於いても、文献は多少蒐集しては御座いますが、なほ甚だ不十分であります故、左の條々御諒承の上、是非とも貴下御珍藏の品々、まげで御出陳の栄を得たく、この段呉々もご依頼申し上げます⁽¹⁶⁾。

この趣意書を大槻は、モリス関連資料を所蔵していると思われる人々に出品用のカードを添えて送ったのである。大槻によれば、「私がモリスに興味を持って以来、既に十数年にもなるので、誰がどんな本を持つてをり、誰がこれに興味を持てゐるかを大抵は承知してゐるので、それぞれの筋へ勧誘状を送りつけた」のだった。最初に返事があったのは市河三喜東大教授（1886-1970）からだったという。市河と大槻は面識はあったものの、そう親しい関係ではなく、勧誘状も帝大英文学教室宛で出したのだったが、「博士からいの一返事に返事が来て、而も想ひがけない文献が出品せられると云ふので、自分は非常に嬉しかった」。ちなみに市河は、モリスとマグヌソン共訳の「サガ叢書」のうちの第1、2巻（この二冊は『モリス書誌』の図版写真にも出ている）を含めて、11冊の文献を提供した（『モリス書誌』の「題簽」〔題字〕も市河の筆になる〔図2〕）。さらに、「柳宗悦氏にも勧誘状を出さうと思つてゐたが、住所が不明で出さなかったら、先方から申出られ、これも自分を恐悦させた」⁽¹⁷⁾。これについては、柳宗悦（1889-1961）からの大槻宛の書簡が残っている。以下の文面であった。

一昨日丸善に行きましたら Morris の文献の事を聞かれ、別紙の六種おしらせ致します。普通ありさうな本はおしらせ致すに及ばないと想ひひかへました。

四月三日

柳宗悦

大槻憲二様⁽¹⁸⁾

そして別紙には、ケルムスコット・プレス刊本二点（ラスキン『ゴシックの本質』とモリスの『ゴシック建築』）を含む稀覯本六点が列挙されている。これが実際に出品されたのだった⁽¹⁹⁾。

展覧会目録を兼ねる『モリス書誌』によれば、出品点数は 280 を数える。それが「一、モリスの原著作」、「二、モリスに関する邦文献」、「三、モリスに関する英文研究書及び参考書」、「四、モリスに関する独仏文研究書及び参考書」、「五、工芸美術作品」、「六、ケルムスコット・プレス出版書」、「七、モリス及びその家族肖像画」、「八、モリス関係丸善在庫品目」と八つに大別されている。出品者は団体では東京帝国大学図書館、個人では以下の 20 名（いろは順）だった。岩倉具榮、伊藤長蔵、市河三喜、石橋武助、長谷川誠也、西村稠、本間久雄、大槻憲二、柳宗悦、小檜山政英、齋藤勇、佐藤清、山宮允、北野大吉、宮田齋、白鳥省吾、繁野順、日高只一、日夏耿之助、森口多里。

この時代としてはやむをえなかったと思われるが、展示品のうち、五の「工芸美術作品」は内容が乏しかった。『書誌』の序文で大槻は、「たゞ遺憾に堪えないのは、モリスの工芸美術作品の実物が殆どなかったことである。主催者は各方面に出来るだけ調査の手段を講じたのであるが、遂に発見することが出来なかつた。来観者諸氏、乞ふこれを諒せられよ」と記している。たしかに「工芸美術作品」の項目に入っている 27 点は、モリスの壁紙や織物、木版画の複製写真が大半で、貧弱なものであったが、「モリス自筆オマル・カイラム詩二章」というめずらしい出品も見られる（目録第 201 番、西村稠出品）。これはモリスが 1870 年代の初めに余暇時間に手がけたカリグラフィの一部で、目録の説明書きには「モリス次女 May Morris 氏より贈られたるもの。vellum 紙に墨を以て書きあり頭文字及び欄外は illuminate する積の如く、未完成なり。大きさは二寸に四寸位の至極小品」と記されている。

展示されたもののなかでは、ケルムスコット・プレス本が最大の呼び物で

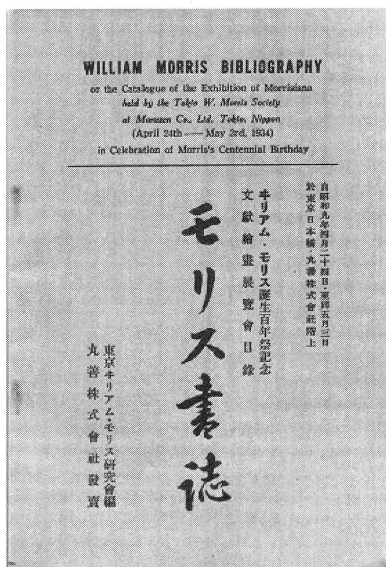


図2 『モリス書誌』の表紙。
題簽は市河三喜

あったことは想像に難くない。展示された 27 点の書目を出品者別で記すと以下のようになる。

(伊藤長蔵出品)『シェイクスピア詩集』, 中世ロマンス『フローラス王とうるわしのジャンヌ』, モリス『輝く平原の物語』(1894 年版), 中世ロマンス『アミとアミールの友情』『クースタンス王と異国の物語』, ロセッティ『ソネットと抒情詩』, 『十五世紀ドイツ木版画集』, モリス『チャイルド・クリストファとうるわしのゴルディリンド』, モリス『世界のはての泉』, 中世ロマンス『サー・イザンブラス』, 『ケルムスコット・プレス趣意書』

(東大図書館出品)『トロイ物語集成』全 2 巻, 『黄金伝説』全 3 巻, テニスン『モード』, モリス『世界のかなたの森』, 『クースタンス王と異国の物語』『チャーサー作品集』『聖処女マリア讃歌』

(日夏耿之助出品)『シェイクスピア詩集』, 『ジョン・キーツ詩集』

(柳宗悦出品) ラスキン『ゴシックの本質』, モリス『ゴシック建築』

(山宮允出品) モリス『ゴシック建築』

見てのとおり、伊藤長蔵が 11 点ものケルムスコット刊本を出品している。これ以外でも、伊藤はモリスの原著作 8 点、関連書 6 点と、あわせて 25 点を提供しており、加えて、番外参考品として、ウォルター・クレイン宛のモリスの自筆書簡、ケルムスコット・プレスの木版校正刷り 15 葉、ケルムスコット・プレスの刊行案内のシートを出品している。伊藤長蔵は神戸出身の金満家で、「ぐろりあ・そさえて」を主催し、愛書家として名高かった。展覧会出品の勧誘状を送る際、「最も期待していたのは神戸の伊藤長蔵であった」と大槻は回想している。

〔伊藤長蔵〕氏が多数のケルムスコット版その他モリス関係の珍品稀宝の所有者であることは、氏が嘗て書肆グロリア・ソサエテを経営してゐられた頃、それ等の秘蔵品を一見させて貰ったことがあるので、自分は今度の催しにこれ等を出品して貰いたいと念願してゐたが、不幸にして氏の現住所が判明せず、旧住所に宛てゝ勧誘状を出しても返事は来ず、

誠に心配をしてゐたが、氏は意外にも東京に店を持ち神戸と東京都の間に常に往来してゐるとの事、面会の機を得て、氏の出品の快諾を得た時には、自分は非常に安心した次第であつた。帝大図書館と伊藤氏蔵品とを併せ展覧するだけでも、この展覧会は立派なものである⁽²⁰⁾。

東大図書館の出品も、大型二折判『トロイ物語集成』、大型四折判『黄金伝説』など、重要な刊本が入っているが、そのなかでも白眉といえるのが、世界の三大美書とも目される、二折判『チョーサー作品集』（『ケルムスコット・チョーサー』1896年刊）であつた。これはじつは会期中の4月28日（土曜日）に一日限りで展示されたのであつた。一日限りとはいえ、これを東大図書館から借り出すのに大槻は相当な苦勞をしたようである。次節で彼の苦勞話をかいつまんで紹介しておきたい。

IV 『ケルムスコット・チョーサー』の出品

東京帝国大学図書館が『ケルムスコット・チョーサー』を所蔵しているのは、英国政府が寄贈したからである。東大図書館は1923年9月1日の関東大震災の折に、飛び火を受けて出火、3日間燃え続けて、蔵書75万冊のうち50万冊が灰燼に帰した。これに英国政府は同情を示し、1929年5月に、時の外相チェンバレンの名において松平大使を経て多くの英書を寄贈した。そのなかに入っていたのがこの『ケルムスコット・チョーサー』にほかならない（他のケルムスコット・プレス刊本も同様である）。「かう云ふ歴史的意味のある準国宝的の珍書なので、帝国大学図書館が恐らくこれを門外不出の秘宝として愛蔵してゐることは固より当然のことである。これを民間私的の催しの中に出品して貰ふことは、恐らく困難であらうと云ふことは、誰しも察し得べきことである」。

しかし、大槻はその貸し出しのために四方に手を回した。まず東大英文科の齋藤勇（1887-1982）に会って打診した。しかし齋藤からは色好い返事が来なかった。東大教授が借用するのでさえ一々大学総長の印が必要で面倒であり、館外持ち出しは禁止されているので、展覧会への出品は不可能だろうとのこと。それで大槻は「悄気た」が、「それに屈せず」、当時の図書館長姉



図3 丸善書店階上でのモリス展の風景。1934年4月28日撮影。後方中央でショーケースに両手を置いている眼鏡の人物が大槻憲二。早稲田大学図書館蔵

崎正治博士（1873-1949）に直談判した。姉崎からは、「あの木造の丸善になど出せるものではない、総長はとても許すまい、併し図書館としてはなるべく世人に見せてあげたいのだから一日だけ位なら図書館から護衛をつけて出してもよいかと思ふが、併し館長としての私の任期は三月一杯で尽きるから後任館長に責任を遺すことは、只今の私としてはお約束できない」と言われた。

それで大槻は「またもや悄気た」が、「それでもなほ絶望するのは早過ぎる」と思い、四月六日に新館長高柳賢三教授（1887-1967）を訪ねた。「豫め手紙を出しておいたので、新館長は自分の用件はよく承知してゐられた。直ちに長澤司書官が呼出されて、三人で対座したが、くどくど云ふまでもなく、では一日だけ護衛二人つけて出品するから、往復の自動車はそちらで心配して貰ひたいとのことであつた。図書館を退出した時の自分の喜びは非常なものであつた。高柳新館長の様子から見て、姉崎前館長との間に豫め多少の默契があつたことは確に察せられるので、あのぶつきら棒の姉崎博士にしてこの温情あるかと、いさゝか有難い感じがした」。



図4 同じく、丸善書店階上でのケルムスコット刊本を背景にしての記念撮影。
1934年4月28日撮影。前列右が大槻憲二。その後ろが夫人の大槻岐美。他は
丸善書店の関係者と思われるが不詳。早稲田大学図書館蔵

その後、大槻は4月12日に丸善を通して印刷所に『モリス書誌』の原稿を渡し、また丸善の社員および写真師を伴って東大図書館を訪れ、『ケルムスコット・チャーサー』を「あらゆる角度から」撮影した。それは『モリス書誌』巻頭の口絵4点に生かされることになった。「この事だけでも、私の今度の催しの大きな意味はあると信じてゐるほどである」と大槻は書いている⁽²¹⁾。

『東京帝国大学新聞』にもこの出品の記事が出ているので紹介しておこう。「門外不出の『カンタベリイ物語』モリス記念展覧会に図書館から出品」という見出しで(『チャーサー作品集』を『カンタベリイ物語』と記しているが、チャーサーの他の作品も収録しているのでいささか不正確)、以下のよう

に記されている。

本書図書館が秘蔵する豪華版「カンタベリイ物語」が会期中一日を限り、廿八日だけ出陳されるので果然各方面の注目を惹くに至つた。……造本

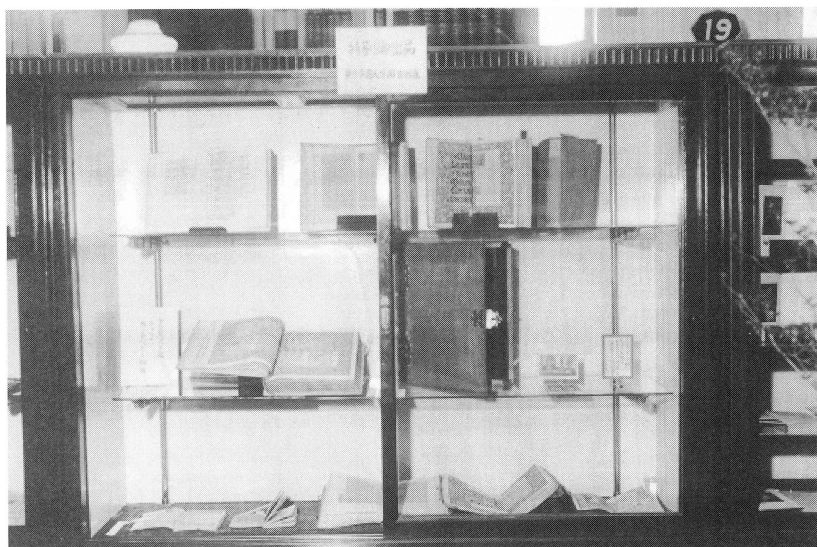


図5 同じく、丸善書店階上でのモリス展の風景。1934年4月28日撮影。東京帝国大学図書館蔵の「特別御出品」であるケルムスコット刊本が収まったショーケースを写す。中央段左に『ケルムスコット・チョーサー』が展示されている。早稲田大学図書館蔵

良心の高さ、その装幀その他の典雅まことに珍書といふべく、時価約二万円と称せられ図書館の最貴重本として金庫の奥ふかく秘められ従来門外不出とされてゐたものである。これが出陳されるに就ては長沢司書官の尽力に負ふ所多く同氏は語る

あの本は外へ出すべきものでない貴重本ですが、折角の催しですしかうした立派なものを寄贈して下さった英国政府の厚意を一般に知ってもらうことにもなるので、一日を限つて出すことにしたわけです⁽²²⁾

この記事からわかるように、当時おそらく日本にまだ一部しかなかった『ケルムスコット・チョーサー』が東大図書館の外部に出て一般に公開された記念すべき日が1934年4月28日だったということになる⁽²³⁾。しかもこの『ケルムスコット・チョーサー』は特装版であった。この刊本は紙刷本が

425部、ヴェラム刷本が13部刷られたが、ヴェラム刷本2部を含む48部はモリスのデザインによってコブデン＝サンダースンのダブズ製本工房で白い豚革を使って特別に装丁をほどこされた⁽²⁴⁾。東大が英国政府から寄贈されたのはその一冊（紙刷り）だったのである。現在では、日本のいくつかの機関がケルムスコット・プレス本53書目66点を揃いで所蔵していて、折にふれて展示会で見る機会があるので、右の記事はいささか大袈裟だと感じられる向きもあるかもしれないが、当時はケルムスコット刊本を目にすること自体が稀有だったのである。出品者の一人で英文学者の西村綱は、「モリス記念展覧会に因みて」と題する一文で、「工芸家としてのモリスが代表されて居なかつたことは遺憾であつた」と不満を口にしながらも、「帝大所蔵のKelmscott Chaucerを始め、諸家のケルムスコット版の本が多数出陳されたのは偉観であつた」⁽²⁵⁾と述べている。

V おわりに

丸善書店、東大図書館、その他出品者の篤志があって成り立ったモリス生誕百年祭記念の展覧会であったが、これまで見てきたように、この「現在日本に於いて示し得べき殆ど全能力を発揮した展覧会」⁽²⁶⁾の成功は、なによりもモリス研究者大槻憲二の尽力の賜物であったといえる。ケルムスコット本そのものは大槻は所蔵していなかったらしくて、出品していないが、総数280点のうち彼が提供したのは78点と、群を抜いている。金銭面でも、経費を丸善書店が全額負担したわけではなくて、『モリス書誌』の印刷費用の4割弱を大槻個人が負担しているのである⁽²⁷⁾。「この展覧会のためには、主催者も後援者もみな多少づつの犠牲を払つてゐるのである。殊に丸善と私とは大きな犠牲を払つてゐるのである。出品目録以外に、現品なきものにとても、いやしくも存在してゐる（分つてゐる限りは）訳書、参考書、研究書は全部その名を挙げ、附録としてモリス年譜、著作年次目録などを挙げ、『その総括的な点では英本国にさへ類のない書誌』を完成したつもりである。この書誌のやうな儲からぬ仕事に流石に犠牲的情熱と学問的良心とを示した丸善当事者に対し、私は敬意と感謝とを捧げておきたいと思ふ」と大槻は「モリス文献展を催して」の一文を結んでいる。その言葉は、なによりも大槻自身に

捧げられるべきものであったろう。

この展覧会の後、大槻は、前述の研究社版の小さなモリス評伝を出した後、『恋愛性欲の心理とその分析処置法』（理想社、1936。1944年に発禁処分）を刊行するなど、東京精神分析学研究所を拠点としての心理学・精神分析学の仕事に完全に移ったように見える⁽²⁸⁾。しかし、早稲田大学図書館が所蔵する大槻関係の資料を見ると、戦後のモリス関連文献にも目を配っていたようであるし、またイギリスのモリス研究者との連絡も絶えてはいなかったことがわかる。1957年にロンドンに創立されたウィリアム・モリス協会の関係者とも手紙のやりとりを続けている。たとえば、初代会長のシドニー・コッカレル（Sir Sydney Cockerell）の跡を継いで二代目の会長となった R. C. H. ブリッグズ（Briggs）からの手紙が残っている。1961年8月4日付の書簡では、モリス協会の機関誌（*The Journal of William Morris Society*）の刊行について相談をしている。「私たちの協会は機関誌を発行する手だてを長らく模索してまいりました。……機関誌に何かご寄稿いただけたら歓迎致しますが、おそらくよくご存知の理由で、原稿料は払えません。〔一人の寄稿で〕2千語程度が適当な量でしょう。……テーマはおまかせします。年に2回発行できればと願っています。順調にいけば、創刊号はこの9月にお届けできるでしょう。第2号にご寄稿なさろうというお考えがあたりでしたら、今年の10月末までにご送付願います」⁽²⁹⁾とブリッグズは書いていて、大槻の寄稿を促している（じっさいには同誌に大槻が寄稿することはなかった）。また、1966年7月16日付の書簡では、ブリッグズは、大槻に対して、1934年のモリス百年祭を手伝った面々とまだ交友があるのかどうか、もしあるなら名前と住所を教えてもらいたい、と打診している⁽³⁰⁾。展覧会から30年以上もたっているのだが、未だに日本のモリス研究の代表者として、窓口に立っていたことがここにかがえる。

さらに、大槻が1966年に刊行した『共産主義分析』においては、第4章で「ウィリアム・モリスの共産主義」を扱っている。これはソ連型共産主義の「病理」を批判的に分析した著作であるが、「共同奉仕」あるいは「相互扶助」というコミュニズムの原義に即して見た場合に、マルクス主義には抜け落ちている重要な視点をモリスが提示している、と大槻は指摘している。とりわけ、エコロジストとしてのモリスの重要性についてふれているあたり

は、これが書かれた時期を考え併せるならば、極めて斬新である⁽³¹⁾。また、同書の序文で大槻はこう書いている。

私は、精神分析学の研究に打込む前に、ウィリアム・モリスの研究をしていた。彼の詩文や図案工芸もさることながら、最も深く関心したのは彼の社会思想であった。それは、彼が人間の個性と社会、及び自然環境との関係を合理的にしようと企てるものであったからである。人間の創造性を生かすには如何なる内外条件が必要であるかを説き得て正しいと思われたからであった。その意味に於いて、彼を研究したことは、私の分析学研究に妨げどころか、むしろ多くの寄与をしたのであった⁽³²⁾。

つまり大槻にとってのウィリアム・モリスとは、フロイトと精神分析学に集中する以前に打ち込んだ初期の研究対象にとどまるものでなく、生涯にわたって関心を持続していた詩人・思想家だったのである。

在野で大槻が日本人として他に先駆けておこなったフロイトの翻訳紹介と精神分析学の臨床的な実践（患者の「自然治癒力」を尊重するホーリスティックな心理療法）の意義については、専門外の筆者が評価する資格はなく、これに関してはその方面の識者の研究を待つしかない（ただし、そちらの再評価もまだほとんどなされていないのではないかという印象を私は持つ）。しかしながら、その方面でもおそらく発揮したと思われる大槻憲二の自主独立の気風、独特の反骨精神は、モリスの生涯と著作にふれることによって、大いに鍛えられたものではないかと、私には思えてならない⁽³³⁾。こんなユニークな先達を私たちは有していたのである。

* 本稿執筆に当たっては、早稲田大学図書館資料管理課長の松下眞也氏に便宜を図っていただき、遺族から同館に寄贈されて間もない（従って未整理の）大槻憲二関係資料を閲覧することができた。大槻の履歴と業績については、御遺族の大槻邦子氏と長井那智子氏にお話を伺うことができた。さらに、丸善書店・本の図書館の富田修二氏、大槻の高弟である山内一佳氏からも貴重なご助言をいただいた。以上の方々に記して感謝申し上げる。

（2004年9月30日受理）

《注》

- (1) 原文は以下のとおり。“The Anglo-Saxon resident in Japan is often surprised at those of his own historic celebrities who are accounted great by his hosts here. He frequently finds that some of his ancestors whom he personally has thought of as somewhat tawdry heroes have had their fame refurbished by Japanese appraisal, while those whose claims to renown he has deemed unquestionable have aroused no similar admiration here. But the two races always find themselves on common ground with regard to great artists, as is surely demonstrated by the various public tributes recurrently paid here to Shakespeare, for example. /This is borne out once more by an interesting exhibition which is opening today at the Maruzen bookshop in celebration of the centenary of the birth of William Morris, the English poet, artist, craftsman and politician. The sponsors of the exhibition are Mr. K. Otsuki, a famous writer and student of English literature, and Mr. R. Mikimoto who has devoted himself to the study of nineteenth century English writers. He has written a number of critical studies of the works of Ruskin and was the founder of the Ruskin Society of Japan.” *Japan Advertiser* April 24, 1934.
- (2) 「キルヤム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会趣意書」1934年3月。大槻憲二によるファイル「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会記録」（早稲田大学図書館蔵）に保存されている。
- (3) 『キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会目録』東京キリアム・モリス研究会編、丸善株式会社発売、1934年。
- (4) 展覧会の翌年に出版したモリス評伝の巻末の「Morris 文献」の末尾に大槻はこう書いている。「詳しい文献を持ちたい方は、昭和九年春日本橋丸善階上でモリス誕生百年祭紀年文献絵画展覧会の催された際に、著者の編纂した『モリス書誌』を参照せられたい。日本文献も網羅せられてある。同書はもし発行所丸善書店に品切れの節には東京キリアム・モリス研究会（本郷区動坂町三二七、大槻方）に御申出ありたし。」大槻憲二『モリス』英米文学評伝叢書57、研究社、1935年、142頁。
- (5) 以下を参照。渡辺俊夫監修『自然の美・生活の美—ジョン・ラスキンと近代日本展』自然の美・生活の美展実行委員会、1997年、91-93頁。荒川裕子編『ジョン・ラスキン：思索するまなざし——御本木隆三旧蔵書を中心に』ラスキン文庫、2000年。
- (6) 以下に大槻憲二の主要著作を年代順にリストアップする。『日常生活の精神分析』（1930）、『経済心理と心理経済』（1931）、『夢の分析法入門』、『精神分析概論』（1932）、『精神分析雑稿』、『モリス』（1935）、『精神分析読本』、『社会生活法』、『恋愛性慾の心理とその分析処置法』（1936）、『現代日本の社会分析』、『新しい立身道』（1937）、『精神分析 分析家の手帖』（1938）、『続恋愛性慾の心理とその分析処置法』、『世界人と日本人』、『精神分析 性格改造法』（1940）、『病床の修養』（1941）、『近代日本文学の分析』（宮田戊子との共著、1941）、

『勝利者の道徳』、『映画創作鑑賞の心理』(1942年)、『結婚と性格』(1943年)、『不安及び不安神経症の心理——フロイド学説批判』、『性格と意志(続・生活改造法)』、『知覚と表現——国語美学の心理学的研究』(1944年)、『日本敗因の科学的検討』(1945)、『天皇象徴論』(1946)、『善悪の研究』、『女性の愛情——精神分析』、『現代犯罪心理の分析』、『精神分析者の手記』(1947)、『現代の心理学』、『精神分析学概論』(1948)、『教養としての精神分析』、『医学と精神分析』、『健全な人間生活』(1949)、『精神分析心理学辞典』(編著, 1951)、『愛慾心理学』、『結婚心理学』(1952)、『愛慾心理学』総論・実例・理論編(1955)、『性格は変えられる』、『精神分析図解入門』(1956)、『性教育無用論』(1957)、『精神分析学辞典』(編著, 1961)、『共産主義分析』(1966)、『雷神の歌——精神分析者の長短歌集』(1968)、『人間学入門』(1973)、『シェイクスピアの精神分析的詩眼——五大悲劇の分析的鑑賞』(1974)、『(以下は没後出版)人間はどこまで正気か』(1948)、『全人類への訴え——世界平和のために』、『民俗文化の精神分析』(1984)

- (7) キリアム・モリス『藝術の恐怖』大槻憲二訳, 小西書店, 1923年。モリスの講演集『芸術への希望と不安』(*Hopes and Fears for Art*, 1882)の全訳に訳者の序とモリスの思想と生活を紹介した緒言を付す。講演5篇の翻訳タイトルと原題は以下の通り。「装飾芸術に就いて(The Lesser Arts)」「民衆の芸術(The Art of the People)」「生活の美(The Beauty of Life)」「最善への道(Making the Best of It)」「文明に於ける建築の前途(The Prospects of Architecture)」

他に大槻はモリスの短篇「王の教訓(A King's Lesson)」を「百姓実験」と題して『書物展望』60号(1936年6月)に発表している。

- (8) 大槻憲二「文芸評論壇の最近傾向」『早稲田文学』221, 1924年7月, 201頁以下。
- (9) 小野二郎「大槻憲二のモリス研究」『明治大学人文科学研究年報』第20号, 1978年。『小野二郎著作集1 ウィリアム・モリス研究』晶文社, 1986年, 417頁。「戦後間もなくでは、フロイトを勉強しようとしたら、この人の翻訳の『フロイド』以外にはなかった」と小野は記しているが、これは『フロイド精神分析学全集』全十巻(東京精神分析学研究所出版部/春陽堂, 1929-33)を指すと思われる。この全集の構成は以下のとおり。第1巻『夢の註釈』(大槻憲二訳), 第2巻『日常生活の精神分析』(大槻憲二訳), 第3巻『社会・宗教・文明』(長谷川誠也・大槻憲二訳), 第4巻『快不快原則を超えて』(對馬完治訳), 第5巻『性欲論・禁制論』(矢部八重吉訳), 第6巻『分析芸術論』(大槻憲二訳), 第7巻『トートテムとタブー・自我とエス』(矢部八重吉・對馬完治訳), 第8巻『分析療法論』(大槻憲二訳), 第9巻『分析恋愛論』(大槻憲二訳), 第10巻『精神分析総論』(大槻憲二訳)。このリストを見ると大槻以外の訳者名も見えるが、それらも大槻が監修にあたり、夫人の証言によれば、「ほかの方の名前でも、実質は大槻が翻訳して」という(「動坂界隈の作家たち——大槻岐美さんインタビュー」『早稲田大学図書館紀要』第48号, 2001年3月, 41頁)。2003年に早稲田大学図書館に大槻憲二の関係資料が遺族から寄贈され

- た。そのなかには、翻訳作業の過程で生じた疑問を質した大槻の手紙に回答するフロイトの書簡が含まれている。
- (10) 大槻憲二『モリス』(英米文学評伝叢書 57) 研究社, 1935 年, 37 頁。
 - (11) 同書, 39 頁。
 - (12) 例えばアマンダ・ホジソンの『ウィリアム・モリスのロマンス』(1987 年) は生と死の相克をモリスの物語作品を貫くモチーフとみなし、『地上楽園』を読み直している。Amanda Hodgson, *The Romance of William Morris*, Cambridge: Cambridge UP, 1987.
 - (13) 大槻憲二『モリス』67 頁。
 - (14) 研究社版『モリス』は主としてモリスの文学面での仕事を評価した著作であるが、大槻はこれを補完する形で、『キリアム・モリス 工芸と図案』の出版を企画していた。その原稿(400 字詰原稿用紙で約 200 枚)が残されている(早稲田図書館蔵)。自筆の自著執筆リストの手帖(長井那智子氏蔵)の記載によれば、これの脱稿は 1935 (昭和 10) 年 1 月であった。社会主義者モリス、あるいは工芸家モリスを個別に見るのではなく、その多面体を有機的に総合することはかった論考であったが、時代の悪条件が不利に働いて、これが陽の目を見ることはなかった。
 - (15) 大槻憲二「モリス文献展を催して」『東京堂月報』1934 年 5 月, 6 頁。
 - (16) 「キルヤム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会趣意書」
 - (17) 大槻憲二「モリス文献展を催して」6 頁。
 - (18) 柳宗悦の大槻憲二宛 1934 年 4 月 3 日付書簡。大槻のファイル「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会記録」(早稲田大学図書館蔵)に綴じられている。
 - (19) 柳宗悦が出品した他の 4 点は、すべてモリスの講演。『裝飾芸術, 現代生活と進歩との関係』(*The Decorative Arts, Their Relation to Modern Life and Progress*, London: Ellis and White, 1878); 『芸術と大地の美』(*Art and the Beauty of the Earth*, London: Chiswick Press, Longman & Co., 1898); 『パターン・デザインについてのいくつかのヒント』(*Some Hints on Pattern-Designing*, Chiswick Press, Longman & Co., 1899); 『芸術・産業・豊かさ』(*Architecture, Industry and Wealth*, Chiswick Press, Longman & Co., 1899)。モリスの没後に刊行された後者三点は、活字にケルムスコット・プレスで使っていたモリスのゴールデン・タイプを使用し、またモリスゆかりのチジック・プレスで印刷されたもので、優美な造本である。それもあるか、モリス書誌では「Kelmescott Press 出版書」のなかに加えられている。
 - (20) 大槻憲二「モリス文献展を催して」7 頁。1934 年 4 月 15 日付大槻宛の書簡で、伊藤長蔵は「此度モリス展覧会御開催の趣誠によるこはしく存じ候 就ては御計画の御話をも尚詳しくお聴し度……」と、面会を求めている(「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会記録」)。
 - (21) 同, 6-7 頁。『モリス書誌』で使われている『ケルムスコット・チャーサー』の写真図版は、口絵 3「Kelmescott Chaucer の外観及び秩」、4, 5, 6「Kelmescott Chaucer の内面」。この内、口絵 4 は、「英国政府が松平大使を経

て同書を帝大に寄贈せし際の、外相 A. Chamberlain 氏の書名」が示されている点で貴重である。その文面は以下のとおり。「本巻は、英国より東京帝国大学に対して、日英両国民の長く続く友情の印として、また 1929 年 9 月 1 日の大震災において大学図書館が被った損害の一部を修復すべく選ばれた寄贈本を代表するものとして、贈呈されたものである。大学を代表して、日本国天皇陛下の特命全権大使であられる松平恒雄殿によって、1929 年 5 月 9 日にお受けいただいた。英国外務大臣、アーサー・チェンバレン」(This Volume was presented by the British Nation to the Imperial University of Tokyo in token of the long-abiding friendship between the peoples of Japan and Great Britain, and as representing a gift of books chosen to repair a part of the loss sustained by the University Library in the great earthquake of September the 1st, 1923; it was accepted on behalf of the University by this Excellency Monsieur Tsuneo Matsudaira, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of His Majesty the Emperor of Japan this ninth day of May, 1929. /Arthur Chamberlain/His Britannic Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs.Foreign Office, London)。

- (22) 『東京帝国大学新聞』1934 年 4 月 24 日。原文はルビ付き。
- (23) 大震災で破壊された東京帝国大学図書館は、1929 年に再建され、同年 12 月に同館内で「英国政府寄贈貴重書展示会」が開催され、『ケルムスコット・チョーサー』を含むケルムスコット・プレス刊本も展示された。以下を参照。ウィリアム・S・ピータースン『ケルムスコット・プレス——ウィリアム・モリスの印刷工房』湊典子、平凡社、1994 年、428 頁（訳者あとがき）。
- (24) ウィリアム・モリス『理想の書物』川端康雄訳、晶文社、1992 年、「ケルムスコット・プレス刊本リスト・解題」39 頁。
- (25) 西村綱「モリス記念展覧会に因みて」『カレント・オヴ・ザ・ワールド』1934 年 6 月 1 日、94 頁。
- (26) 大槻憲二『モリス書誌』序文。
- (27) 丸善書店の関係者がまとめた「モリス文献展諸費用及目録分担額明細表」（「キリアム・モリス誕生百年祭記念文献絵画展覧会記録」）によれば、この展覧会にかかった費用は 41,939 円だった。その内『モリス書誌』の印刷費用が（印刷費、紙代、写真代、版代を併せて）21,346 円。この印刷費用の内の 8,153 円を大槻が負担している。なお、『モリス書誌』は 700 部刷られ、展覧会の会期中に 126 冊売れた（定価 40 銭）。
- (28) 大槻は、1934 年の展覧会当時には本郷区駒込動坂町に居住し、そこを東京ウィリアム・モリス研究会と東京精神分析学研究所の本部としていたが、戦争末期の 1945 年に栃木県西那須野に疎開し、1977 年に没するまでそこで暮らした（ただし、研究会の会合などで上京する機会は多かった）。ちなみに、大槻訳のフロイト『夢の註釈』（1929 年）の訳者序文の末尾に、大槻は「東京近郊阿佐ヶ谷の森巣学堂に於いて」と記している（7 頁）。「森巣」が「モリス」の当て字であることは明らかで、ここにおいては、フロイトの研究とモリスとが象徴的に交差している。

- (29) “The Society has long be looking for ways of producing a Journal.... Whatever you care to contribute to the Journal will be welcome, but, for reasons which will be familiar to you, I must regretfully add that we can offer no fee. About 2,000 words would be an appropriate length for an article.... The subject is of course a matter for you. We hope that it will be possible to publish two issues a year. All being well the first issue will be distributed next September, and if you thought of sending something for the second issue it would be helpful if I could have it not later than the end of next October.” R. C. H. Briggs の大槻憲二宛 1961 年 8 月 4 日付書簡。早稲田大学図書館蔵。
- (30) “It occurs to me that you are still in touch with some of those who, like yourself, assisted with the Morris centenary exhibition in Tokyo in 1934. If so, and if you could let us have their names and addresses, we should be happy to get in touch with them.” R. C. H. Briggs の大槻憲二宛 1966 年 7 月 16 日付書簡。早稲田大学図書館蔵。
- (31) 「マルクスは自然環境の調整などと云うことは全然問題にしなかったが、モリスはこれを強く要請した。人間は逆に自然の一部分であり、正常な自然環境の中にあつてのみ幸福であることを認識し、主張した。……各種の公害、スモッグなど機械文明による自然の破壊は人々の憂慮の種となっている。……このような情勢に就いて早く警鐘をならしたモリスの予言者の叫びに対しては、マルクスに対する以上にこれを高く評価して貰いたいと希う以外に道のないことを、私は残念にも思い、恥づかしとも思う。」大槻憲二『共産主義分析』東京精神分析学研究所、1966 年、78-79 頁。
- (32) 同書、序、4 頁。
- (33) 大槻岐美（大槻憲二夫人、1903-2003 年）は、2000 年 6 月におこなわれたインタビュー（聞き手：宗像和重）において、戦時中についてこんな回想をしている。「大槻が、遠慮なく、軍部にでも何にでも抵抗して、軍部で『ぜいたくは敵だ』っていう標語を出しましたの、ご存知？ そうするととたんに大槻が、『ぜいたくは果たして敵か』っていうような講演をいたしまして、憎まれておりましてね。……ええ。本当にまあ、〔東京から那須に〕逃げてきたようなものでした。知らないでおりましたらね。尾行がついておりまして」（『動坂界隈の作家たち——大槻岐美さんインタビュー』前掲、40 頁）。また、戦時中にも自宅で続けていた東京精神分析学研究所の仕事は、今日風にいえば、カウンセリング・センターにほかならず、精神分析学を机上の理論にとどめずに、生きる場の哲学としていたことが、おなじインタビューにも明かされている。「うちではいつもね、患者さんの相談にあずかるっていうことは、ひとつも書きもしなきゃ言いもしなかったのに、〔大槻の〕本を読んだ方が、なにか大槻のところへ行けば、自分の苦しみやなんか何とか解明してもらえないか、と、まあよく来ました、ほんとによく……それで、そういうことを扱ったせいで、官学派の方のご機嫌を損じたんだと思うんですよ。……学徒出陣なんてあったでしょう。若い方が、大学卒業すると戦場に出なきゃならないんで、そうい

ウィリアム・モリス研究者としての大槻憲二

う方なんか見えたんですよ。ご自分の死に対して、なんとか納得を行かせた
いって気持ちがあったんだと思うんですけどね。そういう方が、ずいぶん、別
に何もしたわけじゃないけど、大槻にきいてもらえば、何か自分がわかるんじ
ゃないかっていう、そういう若い方のお気持ちがあったんだと思いますよ。あの
時分の若い方は、気の毒だったんですねえ、ほんとに」(同, 44 頁)。